

小さな幼稚園



小林美代子

今年一月のアメリカの新大統領カーター氏の就任演説の中に、「より大きいことが必ずしもよりよいとは限らない……」という言葉があった。私はこの言葉を新聞で目にした時に思い

浮かべたのが、「より大きい幼稚園が必ずしもよりよい幼稚園とは限らないであろう」ということであった。八百人、千人という幼稚園は児童収容所のような感じで、教育機関としては絶対反対したいと思う。

私の園は創立後二十数年で、一時は入園希望者が増して二百名を越したが、近隣に県立一園、私立二園ができて、ここ十年近くは百二十名から百三十名を前後している小規模幼稚園である。

学級規模と教職員構成

小規模園のメリットとデメリット

学級数は五クラスで、三歳児一学級二十三名、四歳児二学級

メリットはいうまでもなく、教職員が一体となって児童ひとりひとりの指導に徹底することができる。ことがある。

五十九名、五歳児二学級四十七名、計百二十九名で、三歳児は二組に分かれて進級し、四歳児組はそのまま担任と共に年長組へ進級する。

一年年二学級編成は、教師、児童ともに、指導計画の作成から日常保育実践において、相互交流が緊密に行なわれ、上下の交流もやり易く、指導の効果の顕著なものがあると共に、家庭的雰囲気をかもし出している。

教職員は園長のほか主任教諭一名、学級担任五名、フリー教諭一名（事務と兼任）、兼務職員一名、パートの職員（主として清掃に当たる）一名、計十名である。

「○○ちゃんがもつと遊びたいから帰るのはいやだというの」

「どうして」

「友だちとけんかしていて遊ぶ時間がなくなつたからっていうのよ」

職員室の話題に対して、教師全員がその子を知り、何とかし

てよい方向に向かうようにさせたいと願う。学級担任があり、組の指導は担任にまかせられるが、問題が起きた時、指導に疑問が起きた時、同僚や主任や園長が親身に相談にのれるのは、

小規模園のよさである。同学年四組も五組もあると、歩調を揃えるために時には幼児を無視して計画を押しつけ、幼児が理解しようがしまいが、「やつた」という実績を作るために画一的に詰めこんでしまう。一組の園児数が三十名かそれ以下であり、二組位であると、年間計画が二人で相談しながらやとりをもつて行なわれる。過去に二百名を越して、三組あつた時、歩調をそろえるむつかしさを見せつけられた経験がある。学級担任がそれぞれのもの個性のよさを発揮しながら、幼児ののびる力をできるだけ芽生えさせる指導は、一組の幼児数と、交流する対象の学級数によって、随分と違つてくるようと思う。

幸い、私の園ではそうした理想的の教育ができる規模であると、二十数年の経験から考へている。

デメリットは、国公立幼稚園では気にかからないが、小規模

園では一人あたりの教育費が高くなることである。私立幼稚園は国公立幼稚園と違つてほとんどを父兄負担に頼つていて、園児納付金を抑えると運営に支障を来たす。

理想はよいが經營上困ることで、現実には「大きいこと」はよい幼稚園だから、人が集まるのだというイメージで、カバーしてしまう傾向があるように思われる。

また逆に規模が小さすぎて、年長児一組十五、六人では、友だち関係に偏りができて好ましくないようである。一組の適正規模、園の適正規模を、教育的に考えて研究されたものがあればきかせてほしいと思う。

幼児期の教育は、決して數(量)で考へてはいけない。質で考へていかなければ人間形成はできないと思う。

「せんせい、さよなら。またあしたくるね」

家庭と同じような親しさで思われる幼稚園でやりたい。

(新潟・あさひ幼稚園)